

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博士（学術）	氏名	徐 載 勝
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論文題目			
都市観光におけるフェスティバルの役割とその活用に関する研究			
論文審査担当者			
主 査	准教授	フンク・カロリン	
審査委員	教授	高谷紀夫	
審査委員	教授	秋葉節夫	
審査委員	教授	布川弘	
審査委員	准教授	浅野敏久	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は都市観光におけるフェスティバルの役割に焦点を当てている。研究の目的は①フェスティバルが都市のイメージの生産と消費においてどのように機能し、都市政策においてどのように活用されているか、都市観光とフェスティバルの関係について明らかにすることである。また、②従来あまり取上げられて来なかったフェスティバルの参加者である出演者と訪問者に注目し、参加者の視点からフェスティバルを分析することである。そのために、本論文は都市観光とフェスティバルに関する国内外の先行研究を踏まえた上、韓国の Hi Seoul Festival（以下、HSF）、広島フラワーフェスティバル（以下、広島FF）、神戸まつりの3つの事例から都市空間と都市政策におけるフェスティバルの役割、フェスティバル出演者の観光行動と参加動機、そして訪問者の観光行動、訪問都市に対するイメージと得られた経験や満足について明らかにしようとしている。</p> <p>本論文は8章より構成される。第1章では研究の背景、研究の視点、目的と論文構成について述べている。</p> <p>第2章では都市観光とフェスティバルに関する韓国・イギリス・日本の先行研究を整理している。都市観光が注目される背景や、都市におけるフェスティバルの社会的、経済的、政策的効果についてまとめている。次に日本と韓国の都市フェスティバルの発展と現状について説明し、その共通点と相違点を整理している。そこで日本のフェスティバルは伝統的な祭りとは違い、だれもが気軽に参加できるパレード型が中心となっていることを指摘し、パレード出演を体験型観光の例として位置付け、本研究で重点的に取り上げる理由を説明している。</p> <p>第3章は研究法と、事例の概要と選択理由について説明している。研究方法は研究対象に合わせて設定した。主にフェスティバルの運営に関わる期間への聞き取り調査、フェスティバル訪問者に対するアンケート調査、そしてフェスティバル出演者に対して半構造化されたインタビュー調査と参与観察を行った。出演者インタビューでは質的方法として Means-end chain 理論のコンセプトに基づいた Laddering 記法を使用した。そして、属性、恵沢、価値の三段階で分析を行い、出演者の参加認知構造および最も重視する価値を明らかにした。事例は都市政</p>			

策、都市イメージとフェスティバルの関係を見るために、韓国と日本、首都と地方都市という、あえて異なる事例としてソウルのHSFと広島FFを設定し、行政指導型と民間指導型フェスティバルの比較を行った。しかし、韓国のフェスティバルでは一般市民の出演が少なく、行政指導が強いため、市民参加型の広島FFと神戸まつりを取り上げ、出演者に注目して調査している。

第4章は広島FFとHSFを比較し、行事のアイデンティティをどのように作り出し、訪問者がそれをどのように受け入れているかを明らかにすることで、都市イメージの構築にフェスティバルが機能していることを明らかにした。広島FFの場合、全国各地で行われている花を素材にした行事の中で、とりわけ「平和」というテーマが強調されている点に注目し、それをどのように見せているか分析した。また、HSFの事例では、市長の交代によって都市政策の重点が変わり、そのことがメイン会場の変更を招くという政治的利用が明らかになった。一方、アンケート調査を見ると、訪問者が必ずしもこのようなメッセージを意識しているとはいえないことも確認した。

第5章ではフェスティバルの出演者に注目し、日本の全国に拡大しているよさこいイベントの全国的な動向を把握した上で、広島FFと神戸まつりという2つの事例に参加している出演者の参加実態および参加動機等を明らかにした。その結果、フェスティバル出演は満足度が高く、リピータ率も高い観光行動である一方、費用、時間、体力の制限からパレード出演以外の観光行動には繋がらないことが明らかになった。体験型観光の形態として成立し、知り合いや周辺への口コミによりある程度の普及効果を生み出すが、訪れた都市にそれ以外の観光効果を生み出さない、限られた行動である。

第6章は出演者の動機を詳しく分析している。フェスティバル出演者の参加行動に関する意識構造では、パレードに参加する際「チームとしての参加」、「たくさんの訪問者」などが重要視されていることが明らかになった。また、恵沢（または結果）水準では「出演者との交流」、「独特・異色的な経験」、「観客との交流」などが重要に考慮されていた重要視されていた。なお、最後の価値水準では「楽しさ・うれしさ」という要素が最も重要視されていることを明らかにした。また、この章で使用したmeans-end chainに基づいた分析方法は、練習を重ね、費用も時間もかけて出演する、いわゆる強い動機を持っている観光者の分析に有効であることが確認できた。

第7章では訪問者の観光行動について分析を行った。また、訪問者の訪問先都市に対するイメージとフェスティバルのイメージを明らかにし、再訪問に関係する要因を探った。広島FFと神戸まつりについて「庶民的な」「活気がある」「多文化的な」イメージが目立つ。また、フェスティバルに関して肯定経験と満足を得た集団はそうでない集団より、地域のイメージを強く認知していることが明らかになり、フェスティバルの満足度はフェスティバルが行われる地域への再訪問意思にも関係していることが分かった。

本論文は、これまで日本語の先行研究で取り上げられることが少なかったフェスティバル観光に注目し、資料と現地調査に基づいた分析を行っている。調査方法をそれぞれの調査対象の条件に合わせ、適切に使用している。そうした点で、都市観光学の発展に貢献する研究であると評価し得る。

以上、審査の結果、本論文の著者は、博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

備考 要旨は、1,500字以内とする。